

第 40 回 津市子どもの権利条例づくり推進市民委員会 報告

日 時：2014 年 7 月 17 日（木）18：30～

場 所：市役所 8F 大会議室 A

<参加者>（敬称略）

中村 潔（津市人権擁護委員協議会）、堀本浩史（すばる児童館）、増田和正（津市人権・同和教育研究協議会）、小池啓子（三重県ユニセフ協会）、戸上喜之（津市こども支援課）、小林泰子（〃）、村田有香（〃）、田部眞樹子（津子ども NPO センター）、竹村 浩（〃）、野口寛子（〃）、谷口美子（〃）、山口久美子（〃）、山下恵子（〃）、川喜田ひろ美（〃）

進行：小林さん

●第 39 回市民委員会(2014 年 6 月 23 日)報告

- ・竹村事務局長より報告（当日資料参照）

●子どもの権利条例制定に関する庁内の話し合いの状況報告

戸上課長より報告

- ・一刻も早く整理をしたい。資料はがんばってつくったが差し戻しがあり、その課題について整理をしている。
- ・課題については、葛西副市長よりヒントを頂いている。今月中に副市長との会議があり、8月に市長に出せる。とんとん拍子にいけば 8 月会議には報告ができる。前には進んでいて足踏みではない。任せてほしい。

●前年度旧こども総合支援室につくって頂いた施策と事業の表と、今までグループでつくってきた骨子・施策案とを付き合わせていく話し合いを引き続き行った。

- ・親の側の支援になっていることが多いが、子どもにとってどうなのかという視点で見たい。
- ・愛着形成のためにベビーマッサージもする時代。
- ・出産前からの胎児とのコミュニケーションの取り方を学んでいかなければやり方もわからない。
- ・親支援が要らないわけではないが、施策的にどれほどの意味があるのか。
- ・基本施策としてあげている事業は、あまねく市民に知らせて欲しい。
- ・どこにも参加しようとしなない家庭をどうみていくのかが必要ではないか。
- ・親が相談にきていて子どもの目の前でケンカがはじまるくらいの認識。
- ・幼児の広場も利用している人はあちこち行っているし、人数にしたら全体の中ではたいした割合ではないだろう。
- ・乳児健診、幼児健診に連れて行かない親を批判することでは解決には向かわないので、親が生活を立て直す支援や相談にのることも施策として考えていく必要ではないか。
- ・健診は子どもにとっては子どもの発達を保障し安心して生きる権利である。ここでは子どもの権利の視点で話していくことが大事ではある。
- ・行政が具体的なプログラムを実施していくことに意味はないか。

- ・事業名だけでは内容は分からないが、手の届かなかった子どもたちに届いていくことは必要なことだろう。地域の中で実感していくことをつくっていく必要がある。
- ・行政は予算次第で事業を考えているので、内容にはなかなかいかないのではないと思うくらい。NPOは予算がなくてもやる。やり方次第。
- ・赤ちゃん訪問については、実施はされているが母子保健推進員での訪問。第1子は保健師が行っている訪問できなかった家庭への支援の方が課題であって、事業がばらばらでは子どもをみていくことが分断されている。
- ・地域の人となじめない、孤立している家庭が問題であって、専門家の関わりも大事だけれど地域での支えを考える必要がある。
- ・自分の子どもに愛情が持てない母親の場合、本人がお手上げをしてくれればよいが、親として力もなく子どもにとっては生き地獄。母子寮だとシングルで仕事は探さなければならぬし、健診、予防接種に至っては全く把握されていなかったりして、そこは肩代わりすることがある。肩代わりはずっと続く、途切れなく続く。事例が複雑になっている印象がある。
- ・愛情が持てない要因はなんだろう。親が違う場合。兄弟でも可愛がり方が違う。
- ・中高生へ赤ちゃんとの触れ合い事業をしていこうと思っている。そこでは自分が大事に思えているとか命の大切さを再認識してもらおう。
- ・対応の必要な家庭には必要だけれども、数はどんどん増えていくだろう。行政がすべてやることは不可能。
- ・予算のあるなしではなく、やり方は考えていかなければならない。
- ・学校での性教育も重要。中学校、高校では年1回やるところはでてきている。
- ・教育は学校だけの問題ではない。社会教育やオルタナティブ教育。家庭教育。今の子どもたちに必要な多様な学びの保障は考えていくべきこと。
- ・自分自身の肯定感がないなかに勉強を無理強いしてもできない。五感に触れ、心が育つ関わりができる環境をつくらなければならない。
- ・子どもにとっては先生をはじめ大人の言葉かけや人そのもののプラスもマイナスも影響は受ける。
- ・地域で怒ってくれる人がいたり、仕事をしている場面から大人に触れ合ったりということがない。
- ・社会が変わったわけだから、それを前提にしたことを考えていかなければならない。
- ・子どもたちがネット社会におかれていることの実感が持てない。
- ・大人も使ってみて、自分を縛られることを実感してみたりはする。子どもがしたい気持ちはわかる。
- ・誰かとつながってきたい。虐待する可能性があり。起こりうることを前提にしていく必要がある。
- ・鬼のアプリで子どもを怒る。というのがあがるが、ならば何が必要なのか。
- ・状況はいくらでも出せるが、どうしていくのか。対応だけでは無理。
- ・地域をどうかえていくのか。人でなければできない。子どもに関わる人がいないなら増やすしかない。いろんな人垣をつくる必要がある。学校だけではできない。行政だけでも出来ない。地域ネットワークが必要。
- ・ネットワークは、自分たちの活動を充実させるためにある。「みんなで何かやりましょう」ではない。
- ・施策は誰が主体になってするかに触れている訳ではない。

- ・発達・生存のところから話してきたが、保護・参加のところからはどうか。
- ・参加のことをみても無い。子ども参加を考えたことはあるか。
- ・土曜授業の時間を利用して地域のフェスティバルをやっというこで話をしているが、大人の都合で子どもにさせてあげることではないことを大人がつかむことが難しいのが現実。大人の自己満足になってしまう。子どもにとって参加させてあげる発想になってしまう。
- ・大人に任せたらこんな世の中になってしまった。大人は子どもに謝らない。大人として格好つけたい。上から目線の大人。参加で邪魔になるのは大人。せめてさせてあげるではなく、意見を聞くことは出来ないか。

☆・子ども委員会チーム会議の報告（資料参照）

- ・子ども委員会の報告
- ・あなたの権利は保障されているかというテーマで話し合った。そこそこ満足しているという答えがある。内容をみると、生活に不自由を感じていないという。アンケートにあったご飯を食べさせてくれるからと同じ。
- ・大人の社会なので政治のことなども興味がない。選挙も行かないと言う。興味をもたないと保障されていることにも気がついていない。
- ・表面的にぶつからない関係。
- ・知事に会いたい。話しにもなっている。
- ・子ども委員会チーム会より、8月30日に東員町の町民委員会が尾木直樹さんと呼んで町民委員会の発表、子どもたちの発表もあります。津市の子ども委員会として参加したい。また、子ども委員会のメンバーの交通費（往復2000円くらい）を市民委員会から出してもらえないかという提案があり、検討の結果、全員一致で交通費は出すことになった。

●次回市民委員会は 8月26日（火）18:30～